

第2章 銃後

銃後の暮らし①

ごちそうはパインの缶詰とゆで卵

前鼻 まえはな
勇さんのお話から いさむ

私は、札幌生まれの札幌育ちで小学校、中学校、医学専門学校と札幌ですと育ちました。

戦争当時、日本全国では、大きな被害や日常生活に不自由な面がたくさんあったようですが、札幌はそれほど大きな被害はありませんでした。札幌は当時、まだ人口が二十万人という小都市で、しかも内地から離れており、戦争の空襲なども少しはありましたが、日常の衣食住の生活についても、それほどひどい変化はありませんでした。それで私も、無事にそのまま医学専門学校を卒業して医者になって、そのままずっと現在までできているわけです。

昭和十六年（一九四一年）ごろからだんだんと物資が不足し始めましたが、特に食料が問題でした。食料は、戦地に向けてどんどん送らなくてはならないので、どうしても一般庶民に渡るのが少なかつたのです。

配給制度は、昭和十四、五年にはもう始まっていました。お米については、最初は一人に一合でしたが、それから一、二年たつとだんだん足りなくなるものですから、七勺になりました。一合の七分目です。そして五勺になりました。米一合の半分ぐらいに当たります。それを食べて、あとはおかずを食べれば大人はお腹がすいても何とかやっていけましたが、発育ざかりの子どもにはとても足りませんので、買い出しというものも行われました。

買い出しというと、札幌の場合は、白石や手稲、琴似、それから、豊平には農地がたくさんありましたので、それらの場所に直接行って買ったり、珍しいものを持っていき、農家の方と交渉してお米や野菜と交換したりしました。一番お腹を満たしたのは、秋のお芋です。それか

○内地 一国の領土内で、新領土または島地以外の地。日本で、朝鮮、台湾、樺太などを除いた領土を指した。

○配給制度 米や味噌、砂糖等の食べ物などの物資を、生活の必要に応じ、平等に割り当てて配る制度。札幌市では昭和十五年（一九四〇年）四月に児童のゴム靴に切符制が導入され、六月に米、砂糖などに広まった。

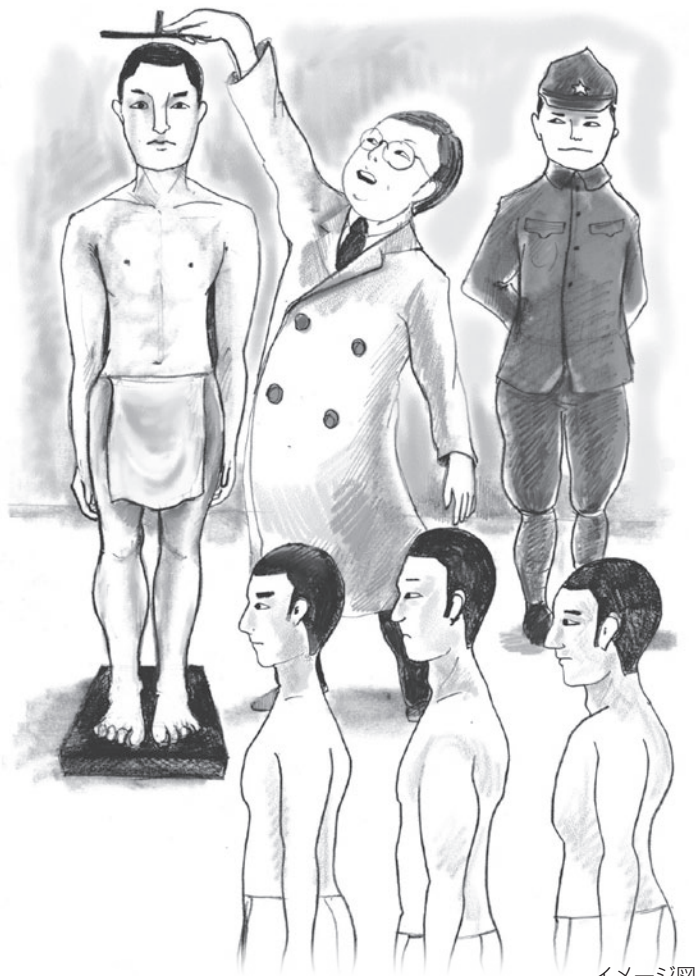
ら、豆類を買ってきて足りない分を補おきないました。

日常の食事では、ぜいたくなものはほとんどありませんでした。お米が一番ですけれども、そのほかに、もち米を買ってきておもちを作ったり、おはぎを作ったりして食べていたのがぜいたくな方でした。当時の食べ物で貴重なものといえば、ゆで卵でした。鶏にわとりはいるのですけれども、卵は本当に少なかつたからです。

また、たいていはお母さんが街に出たときにパインなど果物くだものの缶詰かんづめを買ってきておいて、すぐに食べないで大事に取っておきました。それから、手に入ればバナナを二、三本買ってくることもありました。特に、子どもたちが風邪かぜをひいて熱を出したりおなかを壊こわしたりして物が

食べられないときに、パインの缶詰かんづめを開けて食べさせてくれたり、おいしいつゆを飲ませてくれたり、ゆで卵を食べさせてくれたりということが、当時としては本当にぜいたくでした。私も風邪かぜを引いて倒れたときにパインを一切れ食べた記憶きおくがあります。

農家の人が一番苦しかったことは、農家の働き手であるお父さんが当時は兵隊さんにとられ



イメージ図

兵隊検査

○兵隊検査 満二十歳の男子に兵隊(徴兵)検査が義務付けられていた。検査の結果、甲種(最優秀)も兵役に適している、乙種などにランク分けされた。昭和十九年(一九四四年)に満十九歳に引き下げられた。

○赤紙 人を軍に呼び集める命令書。赤色の紙を用いたので「赤紙」という。

○軍医 軍隊で、患者の診察、治療、衛生をつかさどる医師。

ていたことです。二十歳で兵隊検査を受けますと、ほとんどは兵隊に行かなければならないのです。平和な時代、兵隊検査を受けても、甲種の人だけ行けばよかったです。戦時中から乙種も丙種も全員兵隊さんにとられてそれでも足りないぐらいだったわけです。

昔は兵役というものがあって、兵隊検査を受けて二年間兵隊に行っていると家に帰ることができませんでした。戻ってきたらもういいかと思ったら、赤紙という召集令状が来て、また戦争に來なさいということになりました。農業をやるのに一番中心になる、あるいは重労働をするようなお父さんがいなくなると、あとはおじいさんとおばあさんとお母さん、そして子どもということ、一番困ったのはそれだと思います。

また、あのころは戦争で軍医さんが足りなくて非常に困ってました。そこで国では軍医を早くつくらなければだめだということになり、昭和十四年に北大の医学部のほかに附属医学専門部というのができましたので、私は兵隊さんにただ行くよりはそこに行った方がいいということ、中学校から専門部に入ったのです。

医学部関係の勉強をしている人は、どこの大学へ行ってもみんな兵隊さんに行くことはありませんでした。軍医が足りないのですから、医学を勉強している人は卒業まで待って、あるいは卒業を少し短縮してでも、戦場に行つて軍医をやっていました。

私は、年齢的にも兵隊に行かなければならないと



イメージ図

パインの缶詰を食べさせる親

○援農 日本全国で十二歳から十五歳の中学生が働き手の男性が戦場に行つて手薄になった農村に働きに行ったこと。

いうことで昭和十九年、兵隊検査もきちんと受けたのですが、結局兵隊には行かず、終戦になってから、国家試験を通過して医者になって現在に至っているわけです。

私が医学専門部に入った当時、援農があつて、夏休みの一か月間、農家の家に手伝いに行きなさいということで、私は、日高の浦河の農家に行きました。そのときに友だちと二人で援農で入つたお家のお父さんが召集で取られて、戦死していたのです。そこには当時、五、六歳と三歳ぐらいの女の子が二人おりました。あとは、三十歳ぐらいのお母さんと、おばあちゃんといりました。

あのとのお子さんたちの気持ちはどうだったのかなと思います。私は、戦争というものは、ただ爆撃で死んでしまえば一瞬かもしれません、そのように大事なお父さんを亡くした家庭は本当に気の毒で、戦争さえなければこんなことはないのになど感じました。

十五、六年前に、その家のお母さんからはがきが来まして、「あのとときはご苦労さまでした。」ということだったので、そのはがきを見て、私は涙を流しながら当時のことを思い出しました。いかに戦争がつかいかということをつうせつに感じています。

二度とそういふ戦争は起こしてもらいたくありません。私たち日本はもちろんのこと、世界各国のみなさんが仲よくして、お互いに相手を尊重し、話し合いで物事を解決できるような世の中になってほしいと思います。

DATA

平成21年度白石区平和事業
聴き取り

- ・ 平成22年2月4日
- ・ 本郷小学校



前鼻 勇(まえはな・いさむ)さん

- ・ 大正14年(1925年)生まれ
- ・ 札幌市白石区在住